

あいち生物多様性保全活動担い手養成講座

実践講座・里山編①:保全活動がもたらす『ウェルビーイング』?

ふりかえりレポート

日時:令和6年10月26日(土)9時30分~16時00分

会場/視察先:岡崎市 おかざき自然体験の森

1. 基調講義『都市の中の里山の保全意義』

講師:長谷川 泰洋 先生〈名古屋産業大学 准教授〉

- ・ これまで人の手が加えられることで維持されてきた都市近郊の里山林に手が加えられなくなり植生遷移が進行した結果、里山林としての生物多様性は減少傾向にある一方で、成長した樹木で構成される成熟した森林を好む希少なラン科などの菌従属栄養植物が増加している。
- ・ 手を加える場所と加えない場所を分けることで、異なる遷移の段階の多様性を維持することができるが、そのためにはそれぞれの種の生育地を的確に把握したうえで保全計画の策定、保全作業を行うことが必要。
- ・ 都市近郊の里山林を保全することは、希少種の保全だけでなく都市部の住民にとって緑との触れ合いによる健康効果が得られやすくなるというメリットもある。
- ・ 一方で、自然環境との距離が近づき野生動物との接触機会が増えることは、鳥獣被害や人獣共通感染症への感染リスクの増加という負の影響もある。
- ・ 負の影響を緩和しつつ自然環境からの恩恵を享受するため、人・生態系・動物の健康を一体として管理するワンヘルス・アプローチが重要となってきている。
- ・ 都市近郊における適度に人の手が加えられた里山林は、都市部の住民と野生動物との接触機会を減らす緩衝帯として機能すると考えられるため、都市近郊の里山林保全は日本におけるワンヘルス・アプローチの鍵となると考えられる。



2. 『紅葉の森』での保全活動体験

講師:大高会長〈おかざき自然体験の森 きこりの会〉

おかざき自然体験の森内の「紅葉の森」において、整備活動を実施されている「きこりの会」大高会長の指導のもと、草刈り作業の体験を行いました。

草刈りは、イロハモミジの実生を残しながら、ところどころ表土が見える程度まで行いました。



草刈り作業(左)と草刈りの後(右)の写真

3. おかざき自然体験の森 活動報告

講師:コニックス株式会社 田澤 亜紀子様〈おかざき自然体験の森〉

- ・ 令和4年度におかざき自然体験の森の指定管理者となってから、「自然に目を向けてくれる人・大切にしてくれる人を増やしたい」という目標のもと、イベント・プログラムの多様化や各種団体との関係強化を行っている。

イベント・プログラムの多様化

- ・ 来場者の目的を分析した結果、①地域・社会との関わり形成、②市民活動、③健康・リフレッシュ・癒し、④環境学習・学び・探求の4種類に区分できたことから、既存のイベント・プログラムがどの目的の来場者に対応しているのかを整理し、目的に対応したイベント・プログラムが無い部分についてイベント・プログラムの拡充を行った。
- ・ 既存のイベント・プログラムについても外部専門家を講師とする、実施回数の増加など、参加者のニーズを満たすように改善を図っている。



各種団体との関係強化

- ・ おかざき自然体験の森ではエリアごとに様々な市民団体が活動しており、森づくり協議会を発足させ団体間の情報共有や意見交換、おかざき自然体験の森としての全体的な方向性の共有の場を設けた。
- ・ 西三河生態系ネットワーク協議会に加入し、同協議会員である人間環境大学や県内の9つの生態系ネットワーク協議会と連携して活動を行っているユース組織 GAIA とのつながりが生まれたことで若者世代の来場者が増えたほか、協議会を通して専門家の招致等も行うことができている。
- ・ 社員及びその家族向けの環境活動・環境学習の場として利用したいとの企業からの申出もあり、企業ボランティアの家族向けの企画や SNS を活用した情報発信を充実させることが今後の課題だと考えられる。

質疑応答

- Q. 連続参加型のイベント・プログラムについて、子どもが小学校から中学校に上がるタイミングで参加が途切れてしまうことが多い。継続して参加いただくために工夫していることはあるか。
- A. 連続参加型プログラムの子どもの参加者は現状小学生のみだが、子どもと比較的年齢層に近い大学生がスタッフとして関わってくれており、中学生になっても参加しやすい雰囲気なのではないかと考えている。
- Q. 障害のある方の利用について、対応している事項はあるか。
- A. 障害のある方にも多く利用いただいている。利用についてご相談があれば、利用方法についてご案内させていただいている。

4. 基礎調査体験

今後新たに市民参加型の保全活動を行うことが検討されているエリアをフィールドとして、保全するフィールドの現状把握を目的とした5種類の基礎調査を体験いただきました。

①360度写真の撮影

フィールド全体での開空度の把握を目的として、フィールド内をくまなく歩きながら、およそ5m間隔で全天球カメラを使用し360度写真を撮影しました。木が倒れて樹冠が開けている等、特異的に環境が異なっている地点についても撮影を行いました。

②簡易測量

360度写真を撮影した地点において、スマートフォン及び専用の受信機を測量機器とした高精度測位サービスによる誤差数センチ単位の測量を行いました。

③概況写真の記録

事前に微地形から特筆すべき箇所等に注目して10~15m間隔で設定した地点において、概況写真を撮影しました。



④森の解剖調査

森林が高木(樹高・概ね 15m以上)、低木(樹高 1.4m(胸高)～概ね4m)、草本(樹高・草丈概ね 1.4m未満)などの階層構造になっていることに注目して、階層別に種の構成等の現状把握を行う調査です。「ブラウン・ブランケ法」という植物社会学的手法が一般的に使用されるため、今回は「ブラウン・ブランケ法」を市民参加型の調査として実施できるよう簡易版にアレンジした、以下の方法で行いました。

- ・ 10m×10m のコドラート(方形枠)を設置する。
- ・ コドラート内に生育する植物のうち、手で葉を採取できる高さの植物について網羅的に、ひとつの株から1枚ずつ葉を採取する。
- ・ 階層別に模造紙に貼りつける。同じ種類だと考えられる葉はまとめて貼り付ける。
- ・ 専門家の助言を受けながら、種を同定する。(今回は長谷川先生にご助言いただきました。)
- ・ どの植物がどの階層に何本生育していたか、記録する。



⑤毎木調査

高木層の構成を把握できるのみならず、継続的に調査を行うことで、樹木の体積の変化が把握でき、その森林が吸収した CO₂ の量を推定することができます。胸高(地表面からおよそ 1.2～1.3m の位置)直径 3cm 以上の樹木について、以下の手順により、ナンバーテープを用いて標識を行ったうえで、胸高直径、高さ、樹種を調べました。

- ・ 樹木の胸高(約 1.2m～1.3m)の位置に、ガンタッカーを用いて林業用のナンバーテープを

打ち付ける。同じ方向からテープを打つことでナンバリング済の木が確認しやすくなるため、方向を統一して打ち付ける。

- ・ 直径メジャーを用いて胸高直径を計測する。
- ・ 樹高を目測により測定する。
- ・ 専門家の助言を受けながら、種を同定する。(今回は長谷川先生にご助言いただきました)

質疑応答

Q. 森の健康診断の手法は統一・確立されているのか？

A. 植物社会学でよく使われるのはブラウン・ブランケ法であり、今回はそれを応用した調査手法とした。調査方法は何を調べたいのか、目的によって決めるとよい。矢作川研究所が「森の健康診断」としてマニュアルを公開している手法もあるが、今回はより植物社会学的な視点から調査方法を決めた。

5. 長谷川先生の講評

- ・ 里山は各々が違った楽しみ方をできる場である。
- ・ さまざまな意見を取り入れながら里山を活用していくことが、より多様な生態系を築くことにもつながる。